様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３０６

研究課題名（和文）男性性の構築と軍国主義精神の発揚―19世紀後半から20世紀初頭のイギリス文学周辺

研究課題名（英文）Construction of Masculinity and Promotion of Militarist Spirit; English Literature from Later 19th to Early 20th Century

研究代表者
野末　紀之（NOZUE, NORIYUKI）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：７０１９８５９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、後期ヴィクトリア朝から第一次世界大戦までのイギリスにおいて男性性がいかに構築され軍国主義精神の発揚に寄与したのかを以下の三点から考察した。（１）古典的教養のある唯美主義者とくにJ. A. SymondsやWalter Paterらの言語表象が男性同性愛と軍国主義精神にどう関係しているかを分析した。（２）「筋肉的キリスト教」を代表するCharles KingsleyとThomas Hughesの児童文学および「学校物語」が少年の間に男性性と軍国主義精神をいかに形成したかを調査した。（３）第一次世界大戦に関する大衆文学と墓碑銘に着目し、軍国主義精神の成立と変遷、その実態を検証した。

研究成果の概要（英文）：This project has researched how masculinity was constructed and contributed to promoting militarist spirit in the U.K. from the late Victorian era to the First World War in three points of view. First, we have analyzed how verbal representation was related to homosexuality and militarist spirit in the case of classically trained aesthetes such as J. A. Symonds and Walter Pater, and what strategies they used; secondly, we have investigated how those who represented “Muscular Christianity,” Charles Kingsley and Thomas Hughes, played a crucial role in building and exalting masculinity and militarist ethos among boys, with a focus on their books for children and school stories; and lastly, we have examined how popular literature and epitaphs on the First World War helped to construct the spirit and then transform it, and what it really was.

研究分野：19世紀後半のイギリス文学および文化、表象文化論

キーワード：男性性　軍国主義精神　唯美主義　第一次世界大戦　筋肉的キリスト教　パブリックスクール　児童文学　墓碑銘

１．研究開始当初の背景

イギリスの男性性の研究は 1980 年代から行われ、スポーツ文化によって構築される男性性と帝国主義的エートスとの結びつきを検討した J. A. Mangan や、文学に表象された男性性を研究した Norman Vance らの著作がある。本研究ではそれらの恩恵を受けつつ、そこに欠落している労働者階級への視座、およびパブリック・スクール以外の学校調査を加えて、男性性研究の新たな地平を拓くことを企図している。

野末は、J. A. Symonds や Walter Pater ら古典文学に精通した男性同性愛者たちが、「女々しい」との非難に応えるために「男性的」な軍人や軍国主義精神を利用している点に注目した。また彼らを批判する「筋肉的キリスト教」信奉者のひとりもまた同じ性的志向を持っていた。これら 19 世紀転換期の同性愛文学者のジェンダー戦略はどのようなものであったか。この検討を行うにあたっては、徴兵制度を持たないという当時のイギリスの特殊性に着目し、より広い文脈から男性性と軍国主義精神との関係を検討する必要がある。本研究に二名の研究分担者を加えることにした所以である。

分担者の一人、藤井は児童文学とりわけ「学校物語」に着目する。S. T. Coleridge の神学では、キリスト教は国家のあり方および国民の教育と不可分の関係にある。彼に私淑した F. D. Maurice がキリスト教社会主義運動を主導し、ヴィクトリア朝の代表的児童文学者となる Thomas Hughes と Charles Kingsley が、彼とともに運動に打ち込んだ。彼らの肉体鍛錬嗜好を揶揄した Muscular Christianity が帝国主義と結びついて、独り歩きし、学校教育では自己犠牲と心身の頑健さに重きが置かれた。それらが軍隊精神と通じるかもしれないという仮説のもと、少年が男性性や軍国主義精神を獲得していく過程を調査する。

もう一人の分担者、高橋は主に第一次世界大戦前後の大衆文学を担当する。従来の大戦文学の研究は、大戦による文化的断絶を重視し、従来の男性性は戦場経験により消滅したと論じる傾向が強い。だが文化的連続性を重視する歴史研究の手法を取り入れ、大戦文学の枠を拡大して読み直しを行い、伝統的男性性を重視する傾向は、軍国主義精神に反発するはずの、反戦主義者の著作においても広く見られることを発見した。本研究においては、戦没者の墓碑銘も研究対象とし、大戦前後で男性性と軍国主義がどのような変遷を辿ったかを探る。

２．研究の目的

後期ヴィクトリア朝から第一次世界大戦までのイギリスにおいて、男性性がいかに構築され、軍国主義精神の発揚に寄与したのかを、以下の三つの視座から重層的に研究する。

(1) ヴィクトリア朝文学、とりわけ Symonds、Pater、Oscar Wilde および筋肉的キリスト教関連の言語表象から男性同性愛と軍国主義精神の関係について読み解く（野末）。

(2)キリスト教社会主義と学校教育関連の文献および筋肉的キリスト教徒の草分けである Kingsley と Hughes の児童文学から、特に少年期に着目して、男性性と軍国主義精神の形成について考察する（藤井）。

(3)第一次世界大戦前後の大衆文学および個人の日記、回顧録、さらには戦死者の墓碑銘から、軍国主義精神の成立と実態、およびその変遷について検証する（高橋）。

以上三名の研究を統合し、さらには以下の三点の考察を加えて、男性性の構築と軍国主義精神の発揚との関係をまとめる。(1)「筋肉的キリスト教」という概念が、キリスト教社会主義者から唯美主義者にかけてどのように変遷したかを検証する（野末、藤井）。(2) 大戦に従軍した兵士の思想に、学校で受けてきた教育の痕跡を探る（藤井、高橋）。(3) 唯美主義者や反戦主義者の男性性を否定する言説に対し、彼らが採った戦略を考察する（野末、高橋）。

３．研究の方法

(1)野末は、保守派文化人による唯美主義への「病的」「女々しい」「非国民」とする批判の詳細を資料により調査するとともに、それに対抗する唯美主義者の戦略を解読する。Symonds、Pater らの著作だけでなく、*The Artist and Journal of Home Culture* や *The Spirit Lamp* など世紀末の少部数雑誌に掲載された無署名の作者の作品に至るまで網羅する。

(2)藤井は British Library および相模女子大学が所蔵する Religious Tract Society 関連の資料を調査して、男性性と軍国主義に関して考察する。

(3)高橋は、20 世紀初頭の男性性を巡る言説を調査する。Rudyard Kipling を中心に、軍国主義的な作家の作品を検討する。また、Commonwealth War Graves Commission（イギリス）、In Flanders Fields Museum（ベルギー）を中心に、戦争墓地、墓碑銘に関する文献、および兵士の手記を収集し、現地の専門家と意見交換を行う。さらには各地の戦争墓地で墓碑銘の調査を行う。

(4)月二回のペースで研究会を開き、成果の報告をし、意見交換を行い、共同研究を進める。また、専門家を招聘し、意見交換を行う。

４．研究成果

(1)野末は、おもに Symonds とその周辺の作品研究と文献調査、および Kipling の短篇の研究を行った。Symonds の友人 Charles Kains-Jackson は、雑誌 *The Artist and*

Journal of Home Culture の編集長をつとめた。彼は"The New Chivalry"（1894）において、過去四百年以上イギリスは戦争に勝利するため人口増加を国家的優先事項としてきたが、今後はその必要から解放された男性同士の親密な関係を基盤とすることで繁栄すると述べている。彼は古代ギリシャの軍隊的友愛関係を範としたため、その主張には愛国精神や軍隊的男性性との親近性がある。この論文は抜粋の形で複数のアンソロジーに掲載されているが、調査ではその原文全体をチェックし、匿名性、Marquis de Sade の原文からの引用、Lord Alfred Douglas の同性愛詩とのレイアウト上の共存などを確認した。Symonds の同性愛擁護は古代ギリシャの少年愛に関するいっそう広い学問的知見に基づいているとはいえ、軍隊的友愛に表現される男性性を賞賛していることは Kains-Jackson と共通している。ただし、2017 年に完全版が刊行された彼の自伝 *Memoirs* には、そうした理想像とは程遠い、統御不能な欲望に戸惑い、社会的圧力に苦悩しながら順応する姿がうかがえる。Symonds の同性愛擁護の評価にこの作品の詳細な分析は欠かせない。今後の課題としたい。この自伝には過去の自作詩からの引用が少なくない。調査ではその原典のいくつかを確認した。

この二者に対し Pater の場合、*Marius the Epicurean* の"Euphuism"という章に顕著だが、唯美主義の文体イメージを擁護するさいに軍隊的男性性を利用しつつもその内実を次第に書き変えていく点で、彼らよりも戦略的であり挑発的である（その詳細な考察は近刊の単著で扱っている）。

なお、「筋肉的キリスト教」の言語表象の全般的な調査と分析については進展しなかった。今後の課題としたい。

⑵藤井は 1799 年設立の福音主義系宗教団体 Religious Tract Society（以下、RTS）が日曜学校のご褒美として出版した子ども向けの単行本（金文字、クロス張り、カラー口絵の豪華本）700 冊を調査した。ノンフィクションや科学読み物も多かったが、物語ではやはり学校物語が多く、少女には正直さと優しさ、男子には勇敢さと正義が求められる傾向があった。正義感がなく、勇敢でもない主人公が苦難の末、最終的にそれらの美徳を身に付けるパターンが多い。RTS の本において、社会が期待するものが少年と少女では明らかに異なり、少女の興味が家庭生活に向かうよう誘導されるのに対し、少年の物語は集団の中で成長する学校物語と、世界に目が向けられる冒険物語が圧倒的に多かった。RTS が 1878 年 1 月から 20 世紀半ばまで毎月発行して人気を博した少年向け雑誌 *Boy's Own Paper*（以下 *BOP*）も同様で、ノンフィクション記事が多い一方、冒険物語と学校物語がやはり目立つ。*BOP* 第 1 号には W. H. G. Kingston の *From Powder Monkey to Admiral*、第 2 号は Jules Verne の英訳小説 *The Boy Captain: A Tale of Adventure by Land and Sea* が掲載された。どちらも少年が海で活躍する物語であり、第 3 号以後も、海を渡った異国の地で冒険をすることに、少年があこがれを感じるように作られているものが多く、男性性と軍国主義が、海を通じて結びつく様子が見て取れた。少年に海軍を志向させることが RTS のねらいであったとは考えにくいが、RTS 最大の関心が海外布教であり、*BOP* の売り上げが海外布教の資金源とされたことを鑑みれば、RTS が少年に対して勇敢さ、海の知識を得ること、未開の地への上陸を奨励していたことは理解できる。それは他国を軍事的に侵略することと照応しているのである。

なお、RTS の単行本も *BOP* も、量として膨大であるため、いまだ調査の途上であり、Muscular Christianity の踏み込んだ調査にも至らなかった。ヴィクトリア朝の男性性の構築と軍国主義の発露に関連する重要課題として、調査を継続したい。

⑶高橋は、Commonwealth War Graves Commission のアーカイヴを中心に、同委員会の設立者、Fabian Ware と、文学顧問であった Kipling の軍国主義的思想を中心に資料を収集し分析した。Ware に関しては、戦前彼が抱いていた軍国主義的思想が、戦後は徐々に弱まり、軍国主義的帝国主義から反戦主義的帝国主義へと変遷していく過程を探った。さらには現存する墓碑銘と、検閲によって却下された墓碑銘を調査し、委員会の方針の裏にある Ware の思想を探った。その結果、Ware の戦後の反戦主義は、大戦がもたらした悲劇の反省から生じたものではなく、大戦でイギリス帝国が勝ち取った平和を守るという、軍国主義的色彩の強いものであることを突き止めた。

一方 Kipling は、戦後も軍国主義的態度を維持し続けた。だが墓地や記念碑の碑文を選定、作成する委員会の仕事においては、個人的思想を抑え、可能な限り多くの人に受け入れられるように、抽象的、多義的な碑文を数多く作成した。このような委員会での仕事の経験は、"The Gardener"のような大戦と追悼をテーマにした彼の文学作品にも色濃く反映されている。彼が作成した架空の墓碑銘、"Common Cause"も例外ではない。これまで多くの研究者が、この多義的な作品を、Kipling の思想に沿って一義的に解釈しようと試みてきた。だがこの多義性は委員会での仕事と共通するものであり、その意味を限定させず、単一の解釈を拒むことこそ彼の意図したところであったと解釈できる。

大戦中、そして戦後においても、主戦論者、反戦論者を問わず、自己犠牲やヒロイズムを賛美する従来の男性性の価値観に則って己の主張を正当化していた。だがその一方で、

その数は少ないものの、「男らしさ」を批判して徴兵制の導入に反対する John Maynard Keynes や、自己犠牲を否定する Frederic Manning のように、伝統的男性性を巧妙に否定し、そこから逸脱した発言をする者もいた。彼らの思想が現在に至るまで、どのように抑圧、排除されてきたかを体系的に分析することが今後の課題である。

(4) 研究会において討論を重ねることにより、Kipling の分析に関して当初予定していた以上の進展があった。

従来、戦死兵の遺族への宗教的救済の表現として読まれてきた Kipling の短篇"The Gardener"を、近年の研究に依拠し、むしろ慣習化した儀式による安易な救済への疑念を示唆する作として解釈した（野末）。

Kipling の学校物語の短編を集めた *Stalky & Co.*の考察を通して、主人公たちの遊びが、作戦の立案、司令、実行という軍事行動のパロディであること、学校の近隣の住民を Native と見なし懐柔して利用する一方、気に入らない教師の敵とし、徹底的に攻撃することがわかった。Kipling は児童文学作家としても高く評価されているが、*Stalky & Co.*は少年が主人公であるものの、児童文学作品であるとは、一般的には見なされていない。*Stalky & Co.*の特異性を解明すれば、Kipling の新しい解釈につながる可能性があり、その鍵は上述の「遊び」に垣間見える男性性と軍国主義であろうと推察するが、これについてはさらなる研究を必要とする（藤井）。

また、戦争に関する Kipling の態度は一貫したものではなく絶えず揺らぎが生じている。第一次世界大戦前は、"The Army of a Dream"において国民皆兵制性を理想化する一方で、インタビューでは男らしさを発揮する余地のない現代戦がいかに不毛かを語っている。戦時中から戦後にかけては、"Natural Theology"や"Justice"といった多くの作品で反戦主義者とドイツ人を批判する一方で、"Epitaphs of the War"や"My Boy Jack"のような詩からは、軍国主義の諷刺やパロディ、戦争の悲哀を読み取ることができる。このような多面性を彼個人の実生活と社会活動での経験と結びつけていることである程度は説明できるが、とりわけ戦前に関してはさらなる研究の余地がある（高橋）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 野末紀之、喪の作法―キプリングの「園丁」、表現文化、査読有、第 10 号、2017、21-41
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_111E0000020-10-2

② 高橋章夫、帝国戦争墓委員会と第一次世界大戦の墓碑銘、人文学論叢、査読無、第 19 号、2017、27-37

③ 高橋章夫、現代のイギリスにおける第一次世界大戦とナショナリズム、人文学論叢、査読無、第 18 号、2016、41-51

④ 高橋章夫、*Her Privates We* とマニングの自由―「大戦文学」を超えて、文学・芸術・文化、査読無、第 27 巻第 2 号、2016、53-74

〔学会発表〕（計５件）

① 野末紀之、流動の相のもとに―ペイターの文体にかんする一考察、京大英文学会、2017

② 高橋章夫、キプリングと帝国戦争墓地委員会、日本イギリス児童文学会西日本支部、2017

③ 藤井佳子、キップリングの学校物語 *Stalky & Co.*　日本イギリス児童文学会西日本支部、2017

④ 高橋章夫、戦没者は誰のものか―帝国戦争墓地委員会と遺族、大阪市立大学英文学会、2016

⑤ 野末紀之、ギリシャの利用法―ホメロス、プラトン、ヘラクレイトスの場合、日本ペイター協会、2015

〔図書〕（計３件）

① 野末紀之、論創社、文体のポリティクス―ウォルター・ペイターの闘争とその戦略、2018、320

② 藤井佳子、他、東大出版会、コウルリッジ論集、2018（頁未定）

③ 藤井佳子、他、理論社、『ひげよ、さらば』の著者上野瞭を読む、2018（頁未定）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
野末　紀之（NOZUE, Noriyuki）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70198597

(2)研究分担者
藤井　佳子（FUJII, Yoshiko）
大阪市立大学・大学院文学研究科・非常勤講師
研究者番号：70379527

高橋　章夫（TAKAHASHI, Akio）
大阪市立大学・大学院文学研究科・非常勤講師
研究者番号：10527724

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)